文房四宝

資料提供
（株）四宝堂

【第十一回】「筆の選び方」

◇はじめに

書道において欠かすことのできない文房四宝（筆・墨・硯・紙など）について、基本的な知識を中心に連載しています。第六回（令和六年九月号）では、さまざまな原毛を用いた筆と今後の課題について解説しました。今回は、筆の選び方を述べます。

◆筆の選び方

筆は、製筆法、原材料、穂の太さや長さなどによりさまざまな種類があります。また、基本的に職人が一本ずつ手作りしているため、穂先まですべて同じ筆はありません。

個性豊かな筆の種類は膨大で、初心者の方は選ぶ時に迷うことがあると思います。

今回は、筆選びの主なポイントをご紹介します。

■筆を選ぶ時のポイント

店頭で筆を購入する時は、次に挙げる四点に注目しましょう。

⑴製筆法（穂先の形状）
⑵穂の長さ
⑶穂の太さ（筆の大きさ）
⑷原毛の種類

これらの四点に加えて、どんな字を書きたいのか、どのような作品に仕上げたいのか、また、紙の大きさや書体などを考えて筆を選ぶとよいでしょう。以下に、詳細を解説します。

■製筆法の種類

巻筆……紙と獣毛を幾重にも交互に巻き作られた穂先（写真1）

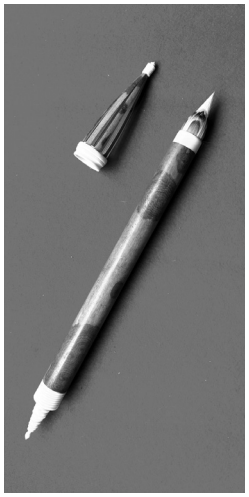
日本で作られた、最も古い筆は巻筆です。しかし、現在はこの製法で筆作りをする職人はあまりおりません。

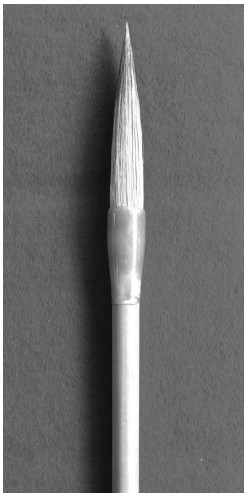
固め筆……ふのりで穂先を固めた筆（写真2）

自分の扱いやすい位置まで筆を捌いて使うことができます。

捌き筆……のりで固められておらず、刷毛のように穂先がバサバサしている筆（写真3）

根元まで墨を含ませて使う筆です。購入前に毛の弾力などがわかるため、自分好みの筆を探すことができます。


【写真1】最古の筆と同じ構造の巻筆


【写真2】ふのりで固められた固め筆

【写真3】穂先が広がっている捌き筆

■穂の長さ（写真４）

穂の長さには複数の種類があり、書く書体などによって使い分けます。

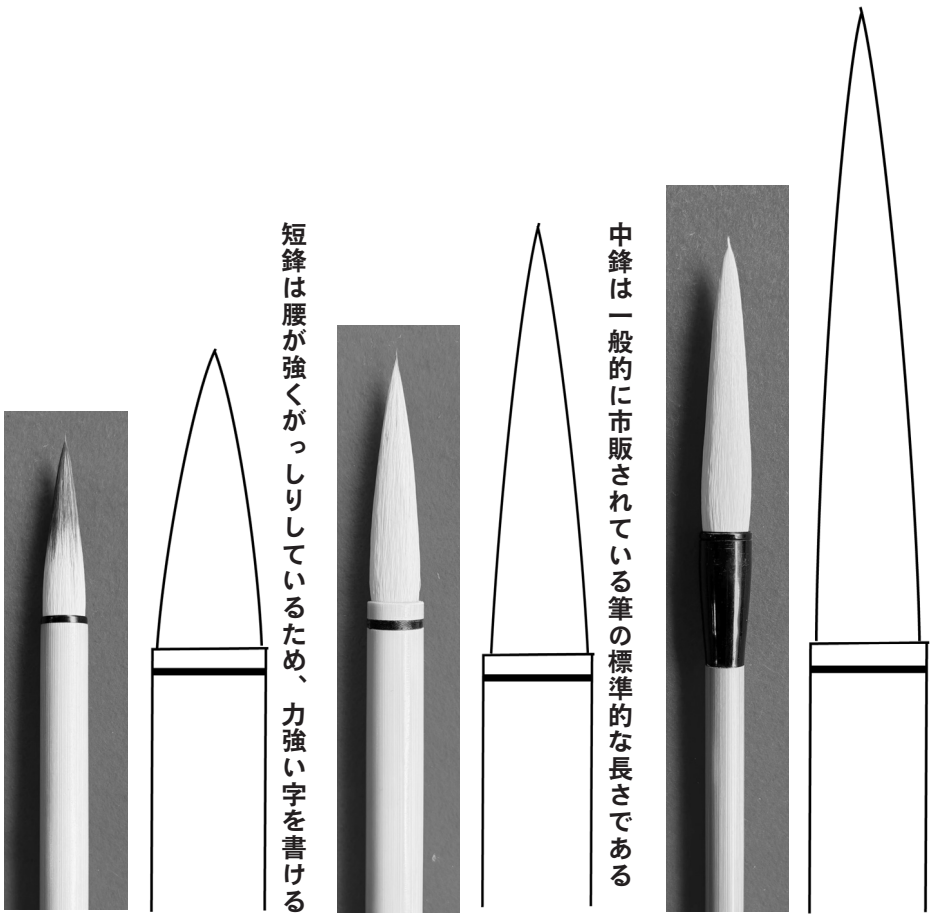
主な穂の長さとしては、

長鋒（ちょうほう）……穂の長さが軸の太さの五倍以上
（主に行書、草書、かな向け）

中鋒（ちゅうほう）……穂の長さが軸の太さの約四倍程度
（主に楷書、行書向け）

短鋒（たんぽう）……穂の長さが軸の太さの三倍以下
（主に楷書、篆書（てん）、隷書向け）

の三種類があり、それぞれ相性のよい書体があります。また、長鋒が一番扱いが難しく、一般的な穂の長さは中鋒です。



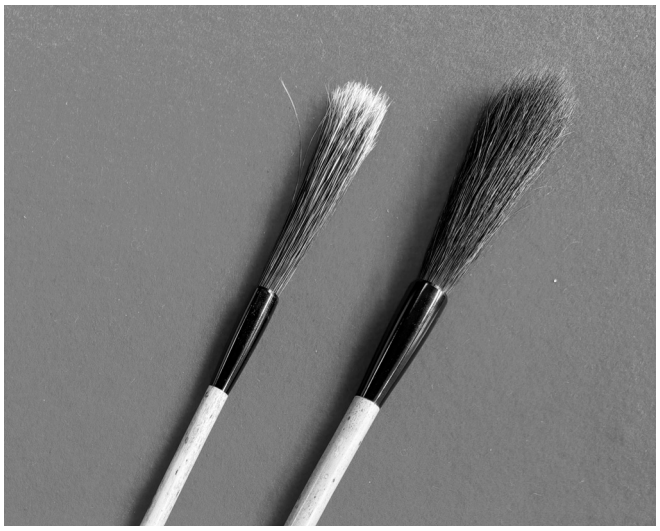
【写真４】長鋒、中鋒、短鋒の比較

■穂の太さ（毛筆の竹軸の規格）

筆の太さは製造元によって多少差はありますが、二号、三号、四号と数字が大きくなるほどサイズが小さくなります。

また、紙の大きさに適した太さの目安として左の表を参考にしてください。

号数	軸の直径と標準字数
一号	約1.5cm（五分以上） 半紙に一文字　半切用
二号	約1.45cm（四分八厘） 半紙に二文字　半切用
三号	約1.3cm（四分二厘） 半紙に四文字
四号	約1.1cm（三分六厘） 半紙に六文字
五号	約1.0cm（三分二厘） 半紙に六文字～八文字
六号	約0.85cm（二分八厘） 半紙に八文字～十二文字
七号	約0.76cm（二分五厘） 中字用
八号	約0.67cm（二分二厘） 中字用
九号	約0.6cm（二分） 細字　書簡用
十号	約0.55cm（一分七厘） 細字　書簡用



【写真５】太い毛が特徴の馬毛（右）と鹿毛（左）の筆

【写真６】弾力がある馬毛を柔毛と組み合わせる

■原毛の種類と良筆の条件

連載第六回でも述べたように、穂の毛の種類も筆を選ぶにあたり、とても重要です。筆は、一体の動物の毛のみで作る方法と、複数の動物の毛を組み合わせて作る方法の二種類があり、使用されている原毛の種類によりその性質がまったく変わってきます。そのため、筆は原毛の色で選ぶのではなく、「毛の硬さ」を基準にして選ぶことをおすすめします。

⑴剛毛筆（硬い毛）

毛が太く、硬度と弾力性がある。腰が強く（紙につけた時に毛の反発する力が強いこと）、高級な筆が多い。主に馬や鹿（**写真５**）、タヌキ、イタチ、ウサギなどの毛が使用されている。現在は地球環境や社会情勢の変化により原毛の収穫量が激減しているため、弾力のあるナイロンを組み合わせた筆も作られている。

⑵柔毛筆（柔らかい毛）

毛が細く柔軟で、墨含みがよく耐久性がある。主に羊や猫などの毛が使用されている。

⑶兼毛筆・兼毫筆（写真６）

剛毛筆と柔毛筆の中間の性質を持つ筆である。中心となる軸毛を剛毛で作り、その回りを柔毛で囲んで作られている。初心者にも扱いやすく、広く普及している。

■良筆の見分け方

良筆を見極める要素としては、「毛先が揃っている」「命毛がある」ことなどが挙げられます。また、中国では古くから良筆の条件に「**尖、斉、円、健**」を挙げています。

「尖」……穂先が鋭く、かつ穂先の太さに対して毛の数が多く、墨含みが十分なこと

「斉」……毛の先端がきれいに揃っていて、毛並みが整っていること

「円」……穂先、のど、腹、腰などの全体の調和がとれていて、無駄がないもの

「健」……毛に弾力があり、長く寿命に耐える作りであること

これらは「筆の四徳」とも言われています。

■固め筆と捌き筆の見分け方

店頭で並んでいる筆は、穂先がのりで固まっている（固め筆）か、または穂先がブラシのように広がった状態（捌き筆）で販売されています。

固め筆は前述したように穂先が固められているため、毛の状態を確認することができませんが、固め筆は上から見た時の穂先と軸の中心（**写真７**）を、捌き筆は穂先の毛の状態（**写真８**）を確認することで、ある程度良筆かを目利きすることができます。

【写真８】穂先の毛の状態に注目する

【写真７】中心を見極める

■目的に応じた使い分け

筆でこだわりたい部分はやはり原毛と穂先です。そして、穂先を自分の表現したい内容や書体によって使い分けることが、よりよい作品制作への第一歩です。また、初学者には「固め筆」で「中鋒」、毛の種類は扱いやすいとされている「兼毫筆」をおすすめします。適度な腰の強さと毛のまとまりがあり、毛先が揃っている良筆をぜひ店頭で探してみてください。

■筆と書体の相性

書道ではさまざまな書体がありますが、書体によって相性のよい筆があります。主な書体と筆の相性を述べます。

⑴楷書（写真９）

法律や定書（さだめがき）、契約書などは書きやすく読みやすい楷書が採用されていることがほとんどです。楷書を書く時は、やや弾力がある中鋒程度の筆をおすすめします。

【写真９】楷書の代表作
孔子廟堂碑（長野竹軒臨）

⑵行書（写真10）

行書は弾力感があり、筆のまとまりを重視した兼毫筆を推奨します。運筆が速いため、墨含みがよい事も肝心です。

⑶草書

草書はしなやかな穂先の回転が求められるため、柔らかい羊毛系の筆と相性がよいです。

⑷篆書、隷書

線筆の中心を穂先が通るため、多少短鋒でやや力感のある筆が向いています。また、波のうねりのような筆勢の波磔（はたく）を求める隷書は、穂先の開閉がしやすいイタチの原毛を使用した筆がおすすめです。

なお、ここで述べている相性は、職人側が考える書体と筆の相性ですので、実際に筆を選ぶ際は自身の経験や力量なども踏まえてあくまでも参考程度にしてください。

次回は、「筆の使い方や手入れの仕方」についてお話しします。

【写真10】行書の代表作
枯樹賦（長野竹軒臨）